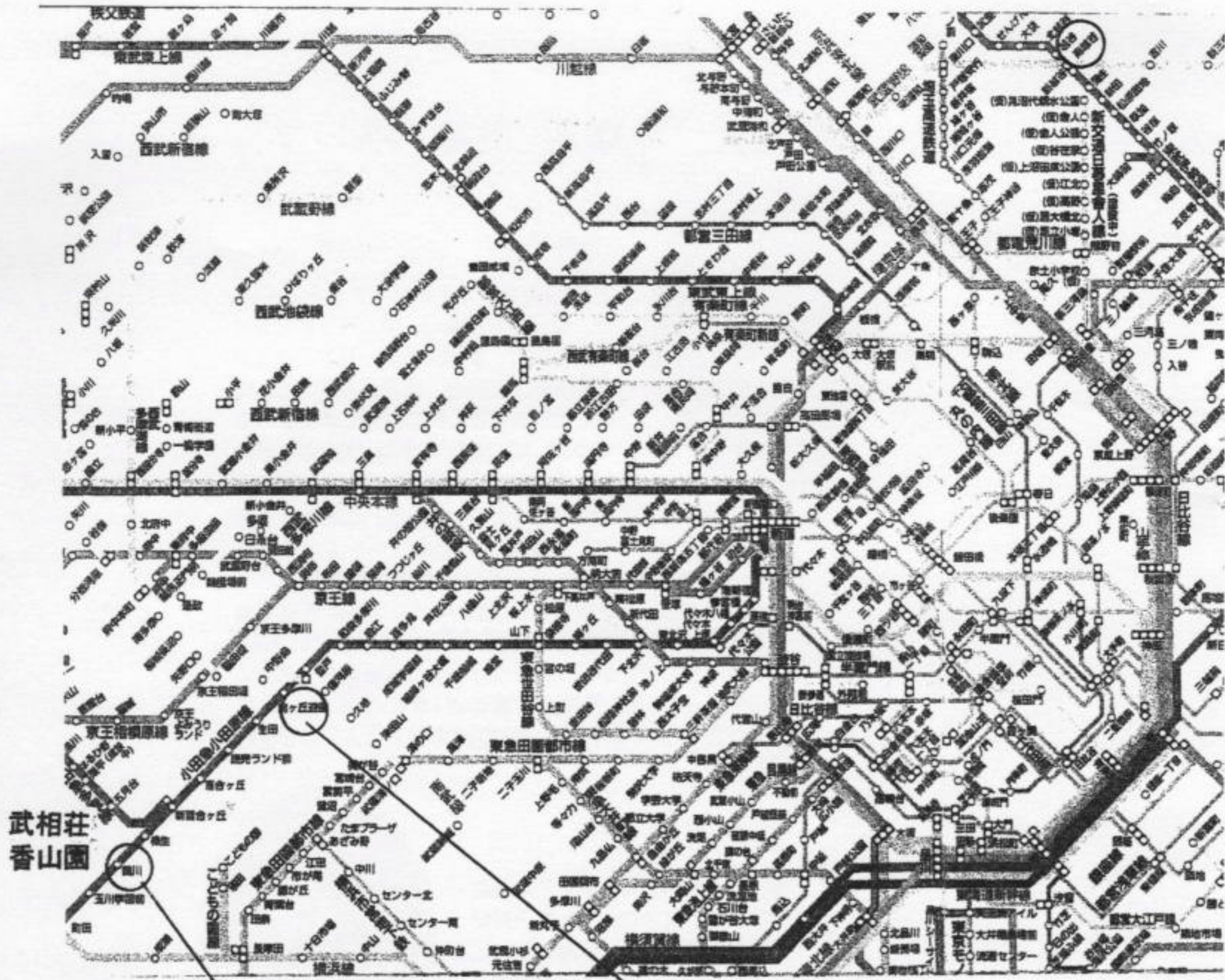


平成二十三年十二月十六日（金）

第四二一回 史跡めぐり 資料

白洲正子の武相荘・日本民家園

越谷市郷土研究会



旧白洲邸 武相荘ご案内

開館時間 10:00~17:00 (入館は16:30まで) ※飲食のお持込みは御遠慮下さい。
 休館日 毎週月・火曜日(祝日・振替休日は開館) 夏季・冬季休館あり
 入館料 1000円(小学生以下の入館はご遠慮ください)



第421回 バス史跡めぐりのご案内 会員限定

白洲正子の武相荘・日本民家園

月日 平成23年12月16日(金)
 集合 午前7時20分 JR南越谷駅前

交通のご案内 小田急小田原線鶴川駅より徒歩15分
 バスご利用の場合は ②番のりば13番 ④番のりば26番系統にて
 「平和台入口」下車徒歩1分



「野人」と「韋駄天」世紀のカップル



白洲 次郎 1902～1985

兵庫生まれ。若くしてイギリスに留学、ケンブリッジに学ぶ。第二次世界大戦にあたっては、参戦当初より日本の敗戦を見抜き鶴川に移住、農業に従事する。戦後、吉田茂に請われてGHQとの折衝にあたるが、GHQ側の印象は「従順ならざる唯一の日本人」。その人となりを神戸一

中の同級・今日出海は「野人」と評している。日本国憲法の成立に深くかかわり、政界入りを求める声も強かったが、生涯在野を貫き、いくつもの会社の経営に携わる。

晩年までボルシェを乗り回し、軽井沢ゴルフ倶楽部理事長を務めた。「自分の信じた『原則(プリンシプル)』には忠実」で「まことにプリンシプル、プリンシプルと毎日うるさいことであった」と正子夫人。遺言は「葬式無用、戒名不用」。まさに自分の信条(プリンシプル)を貫いた83年だった。

白洲 正子 1910～1998

樺山伯爵家の次女として、東京に生まれる。父方の祖父・樺山資紀は薩摩出身の軍人・政治家。

正子も、自分に薩摩人の血が流れているのを強く感じていたという。幼時より能に親しみ、14歳で女性として初めて能の舞台に立つ。

その後、アメリカのハートリッジ・

スクールに留学。帰国後まもなく次郎と結婚する。互いに「一目惚れ」だった。戦後は早くより小林秀雄、青山二郎らと親交を結び、文学、骨董の世界に踏み込む。銀座に染織工芸の店「こうげい」を営み、往復4時間の道を毎日通っていた。この店からは田島隆夫、古澤万千子ら多くの作家が育つ。青山に「韋駄天お正」と命名されるほどの行動派で、自分の眼で見、足を運んで執筆する姿勢は、終生変わらなかった。



武相社

無駄のある家

鶴川の家を買ったのは、昭和十五年で、移ったのは戦争がはじまった直ぐのことであつた。別に疎開の意味はなく、かねてから静かな農村、それも東京からあまり遠くない所に住みたいと思つていた。現在は町田市になつてゐるが、当時は鶴川村といい、この辺に（少なくともその頃は）さらにあつた極ふつうの農家である。手放すくらいだからひどく荒れており、それから三十年かけて、少しずつ直し、今もまだ直しつづけている。

もともと住居はそうしたもので、これでいい、と満足するときはない。綿密な計画を立てて、設計してみた所で、住んでみれば何かと不自由なことが出て来る。さりとてあまり便利に、ぬけ目なく作りすぎても、人間が建築に左右されることになり、生まれつきだらしない私は、そういう窮屈な生活が嫌いなのである。俗にいわれるように、田の字に作つてある農家は、その点都合がいい。いくらでも自由がきくし、いじくり廻せる。ひと口にえば、自然の野山のように、無駄が多いのである。

牛が住んでいた土間を、洋間に直して、居間兼応接間にした。床の間のある座敷が寝室に、隠居部屋が私の書齋に、蚕室が子供部屋



終戦間もないころの空撮。「武相荘」住人の姿も。

に変わった。子供達も大人になり、それぞれ家庭を持ったので、今では週末に来て、泊る部屋になつてゐる。あくまでも、それは今この瞬間のことで、明日はまたどうなるかわからない。そういうものが家であり、人間であり、人間の生活であるからだ。原始的な農家は、私の気ままな暮らしを許してくれる。三十年近くの間、よく堪えてくれたと有がたく思つてゐる。〔思うこと〕——白洲正子著あつて（青土社）より

さきまが展示によって、ありし日の白洲夫妻の面影を感じさせてくれる「武相荘」。しかし、企画展示の品々だけが、ふたりの気配を感じさせてくれるわけではありません。実は「武相荘」のそこかしこに何気ない夫妻の生きた証が秘められているので

す。ここでは、長女である牧山桂子さんから伺ったふたりに纏わるエピソードとともに、知られざる「武相荘」の奥所を紹介することになっています。それぞれの場所は156〜157ページの完全ガイドマップで確認してください。

知られざる往時の気配

「武相荘」のひみつを知る

一、書斎の襖に隠された、驚愕の新事実発覚！

次郎と正子の意地の張り合い!?

母屋の見所のひとつと言っている奥座敷にある正子さんの書斎ですが、その襖に驚くべき新事実が隠されていました。京唐紙で襖を新調する際、襖の表と裏をどちら側にするか(つまり襖の表になる唐紙をどちらの面にするか)で、夫妻は議論になったといわれています。曰く、次郎さんは「部屋の外側に向いた面が当然表だ」と主張し、正子さんは「いや、私の部屋なのだから、私のいる中側が表面だ」と結局は仲よく折衷案に落ち着くこととなって(写真)手前の襖は部屋の外を表面、奥の襖は部屋の中を表面としたのですと、ここまで話した桂子さんがハタと気がつきました。

「あら、手前側も部屋の中が表面になっている。今の今まで気づかなかったけど正子さん、次郎さんが亡くなった後に、だれにも言わずに勝手に裏

表面にしたんだわー」。ちなみにこちら側に見えている松文様が裏面用の襖地。表面は美しい雲母刷の枝椀文様となっています。



二、今も邸内各所で、次郎さんの手になるさまよひさまよひものたちが、現役で活躍中

必要なものがあれば、せつせと白曜大工に頼んだという次郎さん。その痕跡は企画展示物以外にもたくさんあって、実は屋敷内に、まだまだ現



役で活躍中のものもあります。そのひとつが、写真の鍵札。建物が多くなれば当然鍵も増えるわけで、それを整理するためにひとつづつ札をつくったのでした。現在も実際の建物に、名札代わりにかけられています。(第2ギャラリー階段付近など)

三、現状の「武相荘」の次郎さんの大工仕事の成果がある



写真の白を有効活用(?)した新間受け(長屋門脇)は、次郎さん作の有名なひと品。ですが先述の鍵札のように、そうと意識して見ないことには気づきようがない物も何気なくある「武相荘」。正子さんが使っていた食堂のトースター台や掃除道具入れなどは展示物として紹介されていますが、土間の竹のスタンダードや、入口にある靴べらなど、展示物ではない(とも言えないが)ものも、じっくり探してみるのも一興。

四、庭のほぼ正面に据えられた、美しい姿の三重塔。実はこの下にもエピソードが埋まっている

正子さんの著作をくまなく読んでいる方々には周知の事実ですが、竹林の前にある鎌倉時代の三重塔の下には、実は次郎さんの遺髪などが埋められています。正子さんはそのことを、1986年8月号の「芸術新潮」誌上で次のように記しています。



〔前略〕兵庫県の三田では遠すぎて、墓参りして下さる方に迷惑をかけるため、私が住んでいる家の一角にも小さな墓を建て、次郎が生前に愛した食器その他、こまごましたものを埋めた。別に供養塔とか詣墓を氣どつたわけではなく、偶然私が持っていた鎌倉時代の三重塔が役に立った。私が留守の時でも、花が供えてあつ

たりして、ひそかに参って下さる方たちがあるのをかたじけなく思っている(現在は、「私の墓忌札」として「夕顔」に収録) ちなみに、次郎さんと正子さんのお墓は、正子さんが生前につくった五輪塔をかたどった墓石で、次郎さんの故郷である兵庫県・三田の心月院にある。

五、晩年は書斎と化していた食堂の、台所に近い側の椅子は

正子さんが死守

晩年の執筆風景を伝える写真でもわかることですが、現在の第1ギャラリーにあるテーブルの、いちばん右側に近い側の椅子に正子さんは必ず座っていました。そこには「私は決して主膳の座を明け渡してはいない」という意思表示があったと桂子さんは述懐します。「家事はまったくしなかつたのに、そういう意識だけは強固でした」。

六、母屋の裏にある、石垣にもかくれた逸話

表からは垣間見えないエピソードのひとつ。次郎さんが戦後間もなく、GHQとの折衝にあたるため、かねてから懸念だった吉田茂元首相の右腕となったのは周知の事実。それが縁で、当時首相公邸だった旧朝香宮邸(現庭園美術館)に植えられていたブラジル産の蕨が、同時期に「武相荘」にも持ち込まれ、今も書斎の窓から微かに姿を覗かせているとか。「ブラジル大統領から贈られた蕨だから君の家にも一株植える」と吉田さんが次郎さんに手渡したのだそうです。

七、鈴鹿峠の石塔には、

新婚旅行での思い出が込められている!



今、周回路となつて、真山の入口に建つ石塔は、晩年に正子さんが手に入れたものですが、そこに刻まれている「鈴鹿峠」とは、白

洲夫妻が新婚旅行の道中に、文字どおりの五里霧中に遭遇した峠の名。それに纏わるエピソードについては、桂子さんの著「次郎と正子 娘が語る素顔の白洲家」(新潮社)を、一読あれ。

十、正子さんの父方・樺山家伝来の

遺構も数多く残る

「武相荘」の風景に何気なく溶け込んでいる石材や家屋の構成材にも、歴史的遺品は多い。庭の奥にある大きな石灯籠や、周回路に置かれた各種



の石塔などは、そのほとんどが大磯にあった樺山家の別荘に伝わったものだという。中でも面白いのは、母屋入口にある三和土の板。なんとこ

れ、大磯の樺山家で使用されていた台所のまな板を流用したもの。旧華族の家のまな板とはかくの如きかと妙に納得する代物。

八、食堂前の生垣に、

宮家との交流の証



至るところ花と緑が絶えない庭内の中でも、特筆すべきは食堂前(現第一ギヤラー)の藤棚付近にあるバラひと口にバラと言つてもささげまでですが、これはその原種のひとつで、その由来がまた貴重。なんと三笠宮寛仁親王妃信子さま(吉田茂元首相の孫)が接木した苗木を譲り受けたものだといひます。

九、「鈴鹿峠」の

石碑の先には、めぐるめく歴史遺産が



「武相荘」の裏山とも言うべき丘陵をめぐる周回路には、歴史的遺構が散在。中でも極の付きがこの碑然とした安の巨石でその由来を聞いて吃驚。なんと、かの加藤清正公が出兵の際に使用した旗立用の石がその実体とのこと。さすがは伯爵家出身の正子さんの自邸らしい遺品と言えらるでしょう。



今も音楽の主が遊んでいるかのよう。

築百数十年にもなるいわゆる古民家をリノベーションし、新たな生活空間として活用するスタイルは、今でこそひとつのステイタスとして認識されるようになっていますが、白洲夫妻が豪華農家を買い取り、そこで暮らし始めたのは、今から65年以上も前のことでした。時あたかも、日本が奈落の底へと突き落とされた、太平洋戦争という悪夢へと踏み出して間もないころのこと。古いものを大切にしつつ、絶えず手を加えながら住まうというスタイルで、現代に生きる私たちが魅了し続ける白洲夫妻の暮らしの姿「武相荘」という存在が生まれたのは、

ただ先見の明があったというだけでは語れない。夫妻の生い立ちと独自の人生観に寄り添った「絶対的なよきもの」を造りすぐる審美眼がもたらした奇跡だったと言えるでしょう。自分たちが購入した家屋がかつての武蔵国と相模国のちよと境に建っているという意に加え、さらにはその住人となる主の風情をもその名称に託し、自邸を「武相荘」と名づけた白洲夫妻のセンスにもそれが如実に表れています。かねてより東京郊外の農村に住みたいと思っていた夫妻が、知り合いのついで一軒の農家を購入したのは、1940年(昭和15年)。それから少しずつ修理をし、実際に東京郊外・鶴川村に移り住んだのは、手に入れてから数年後の春のことでした(1942年とも43年ともいわれる。年月については諸説あり)。当初は戦争激化によって日本が食糧難になることを危惧し、食糧自給が可能な田舎の農家ならばと、農場ののぎのつもりで鶴川村の豪華農家を譲り受けたのですが、これがすべての始まりでした。このとき、白洲夫妻のいすれもが、この家の種家になるなどは、雀の涙ほど想像しなかつたようです。「鶴川にひっこんだのも、疎開のためとはいえず、実は英米式の教養の致すところ、彼らはそつと種家の



母屋入口の信楽の壺には花が「絶えない」。



春には美味しい「若」がとれる竹林。

「武相荘」今昔 「武相荘」をめぐる物語

今もふたりの人生の芳香漂う「武相荘」は、私たちにとつての「かくれ里」

人間を「カントリー・ジェントルマン」と呼ぶ。よく「田舎紳士」と訳されているが、そうではなく、地方に住んでいて、中央の政治に目を光らせている。遠くから眺めているために、渦中にある政治家には見えなことがよくわかる。そして、いざ鎌倉という時は、中央へ出て行って、彼らの姿勢を正す(白洲次郎の「遊鬼 わが師わが友」(新潮社)より) 早くから海外に向いた夫妻らしい見識によって、当時の賞識では計り知れない農村生活がスタートし、現在へと続く「白洲フォーム」の文字どおりの礎となったのです。この地を訪れた人ならばわかる。とですが、その名に似ても似つかないほど、時々刻々とささげさまに表情を変え美しい「武相荘」は、正子さんが記した名著「かくれ里」にならば、まさしく現代に生きる私たちにとつての「かくれ里」と呼ぶべき存在。いつまでも、ひっそりとあり続けてほしいと願わずにはいられません。

先に引用した白洲の「週刊新潮」の回想を引こう。

GHQ側は、草案を日本側に手渡すと、その具体化を急いだ。また、日本政府内の意見がまとまらないうちの某日（引用者注——三月二日のことであったと思われる）、ほくはホイットニー氏に呼び出された。至急、翻訳者を連れて来いというのである。そこで外務省翻訳官だった小畑薫良氏（昭和四十六年死亡）らと同道して改めて訪ねると、彼はGHQ内に一室を用意しており、「マッカーサー草案」の全文を一晚で日本語に訳すよう要求した。

こうして——日本語で書かれた最初の「新憲法草案」は、専門の法律学者の検討を経ることなく、一夜のうちに完成した。もっとも元の英文による原文として、おそらくは専門の憲法学者の手には触れていない。せいぜい法律家の目を通していたとしても、戦時応召でマッカーサー麾下に入った弁護士上りの二、三の将校たちぐらいではなからうか。したがって、たとえ翻訳の際にこちらの憲法学者が立ち会っていたとしても、何ほどの効果を挙げ得たかは疑問である。

が、天皇の地位を規定して、草案が「シンボル・オブ・ステーツ」となっている点は、さすが外務省きつてのわが翻訳官たちをも大いに惑わせた。

「白洲さん、シンボルというのは何やねん？」

小畑氏はほくに向って、大阪弁で問いかけた。ほくは「井上の英和辞典を引いてみたら、どや？」と応じた。やがて辞書を見ていた小畑氏は、アタマを振り振りこう答えた。

「やっぱり白洲さん、シンボルは象徴や」

新憲法の「象徴」という言葉は、こうして一冊の辞書によって決ったのである。

ダレスは独立と引き換えに再軍備を求めたが、吉田は受け入れない。経済復興を第一とするために軍備に多くの予算を割くわけにはいかないのだ。さらに日本の再軍備には国際社会の反発も予想される。独立と再軍備ワンセットの話に日本がすぐ乗ってくると予想していたダレスは不快の表情を隠さなかったという。

しかし、事態は思わぬ形で展開する。吉田・ダレス会談からわずか三日後の六月二十五日に朝鮮戦争が勃発。アメリカはやはり日本には軍隊が必要だとの意を強くし、吉田はあの憲法を作ったGHQから警察予備隊の創設を求められた。吉田茂はこの命令を受け入れた。一刻も早く独立を勝ち取りたい故の吉田の決断だったのである。

そして八月一日、今日の自衛隊の前身である警察予備隊が創設された。

吉田茂は再び次郎をアメリカに派遣して国務省顧問のアレン・ダレスと会談させたが、その折、ダレスは警察予備隊をさらに増強するよう圧力をかけてきた。

これに対し、次郎は、

「それなら国民を再教育しなさいよ！ GHQ民政局、すなわちあなたがたアメリカ人が「戦争は悪だ」「今度の憲法では戦力を放棄したんだから軍隊は持つてはならないんだ」と、日本国民を教育したんじゃないですか。今さら手の平を返して軍備増強しろとはよくもまあ言えますね」

と突っぱねた。次郎は「戦争には負けたが、奴隷になったわけじゃない」が口癖だったのだ。



一九四五（昭和二〇）年一二二四日には、いうまでもなく、終戦後に日本国が初めて迎えたクリスマスの日であった。

この日、終戦連絡中央事務局参与の次郎は、彼を任命した外務大臣吉田茂の名代となり、お堀端に建つ第一生命ビル六階に向かっていた。

昭和天皇からダグラス・マッカーサーへクリスマス・プレゼントを渡すためである。マッカーサーは、一九四五（昭和二〇）年八月三〇日午後二時五分、マニラからC-54輸送機バタイン号に乗って厚木基地へと降り立った。コーンパイプに黒のサンダラスといういでたちで、タラップの上からあたりを睥睨するその勇姿は、抵抗しようのないアメリカという強大な権力の到来を日本人に予感させた。

だがマッカーサーがこのように悠然と構えていたのは実はまるっきりのポーズで、二日前には先遣隊を上陸させて偵察を命じていたという。フィリピン戦線で勇猛果敢な日本軍に悩まされた経験があるだけに、マッカーサーは本当のところ不安で夜も眠れず、ズボンのポケットにはいつも拳銃を忍ばせていた。彼は名将よりむしろ名優だったと今日ではされてもいる。

この日のGHQ最高司令官・マッカーサーはいつも通り軍服に身を包んでいたが、次郎は、とても敗戦国の使者と思えないほど洗練された恰好であった。イギリスのヘンリー・ブルで仕立てた背広姿に、これまたロンドン製の靴を履き、髪は今しがた帝国ホテルの床屋で鉄を入れたばかりというスマートないでたちだったという。

マッカーサーに会うや、次郎はイギリス仕込みの流暢な英語であいさつし、贈り物を差し出した。ところが、マッカーサーは感謝するどころか、テーブルの上がほかの贈り物でいっぱいなので、絨毯を親指で指し、きわめて事務的にこう告げた。

「その辺に、置いていってくれ」

その言葉に白洲次郎が火を噴くような形相で、マッカーサーを一喝した。

「これは天皇陛下から足下への贈り物である。天皇陛下はこの国を統べてこられた。たとえ、敗戦国の統治者からの贈り物とはいえ、それなりの礼を尽くして受け取られるのが原則というものではないか。にもかかわらず、その辺に置けとは何事であるかっ！」

意外なものを見るように、マッカーサーは次郎を見た。

「礼儀をわきまえぬものに贈り物を渡すことはできない。持ち帰らせていただく」

「待ってくれ」マッカーサーはうろたえ、秘書官を呼び寄せるや、新しいテーブルを用意させた。そして贈り物を受け取り、うやうやしくそこに置いたという。

日本人離れした体躯と、イギリス流ダンディズムを身に付けていた次郎は、このようにアメリカ人と相対しても、位負けするどころか、むしろ相手が威圧感を感じるほどだったようだ。ただし、この時の次郎は天皇の威厳を守ろうとしたのではなく、人間としての原則を守ろうとしたに他ならない。

また、GHQの指令は文書の形で渡されたが、口頭だけの指示の時も多かったという。そんな時、次郎は「文書にしてほしい」と必ずはっきりと要求したという。

後からGHQに、「日本政府が勝手にやったことだ」といわれても、公式記録がなければ反証できないと懸念したからである。文字通り「無条件降伏」を地で行った日本人は、容赦なくGHQの現場から排除された時代であったが、彼らに「唯一従順ならざる日本人」といわれながら、次郎は職務を全うした。それは次郎の言辭行動が、彼らのルールと常識に則した正論だったからに相違ない。

白洲次郎略年譜



- 一九〇二(明治三五年) 二月十七日、兵庫県芦屋に生まれる。父文平は綿の貿易で産を成した富豪。「傍若無人な人」だったという。
- 一九一九(大正八年) 神戸一中を卒業。学校では乱暴者、ベイジ・グレンブルックを乗り回す「驕慢」な中学生。まるで「鳥流し」にされるが如く、英国に渡り、ケンブリッジ大学クレアカレッジに入学。
- 一九二五(大正一四年) ケンブリッジ大学を卒業。英国ではベントレー、ブガッティを乗り回すオリイボーイ。七世ストラップフォード伯のロビン・ピンクとの終生の交わりを結ぶ。
- 一九二八(昭和三年) 大学院で歴史を学び、学者になろうとしていたが、自家の「白洲商店」が倒産したために帰国。
- 一九二九(昭和四年) 樺山正子と出会い、結婚。「ジャパン・アドヴァタイザー」という新聞社の記者となる。その後「セール・フレージャー商会」という商社の取締役に就任。
- 一九三七(昭和十二年) 「日本食糧工業」(のちの「日本水産株式会社」)の取締役に就任。一年の

大半を外国で暮らす。吉田茂と親しくつきあい、英国大使館が白洲の常宿となる。

- 一九四〇(昭和一五年) この頃仕事から退き、日本が戦争に突入すれば食糧不足になることを予見し、鶴川村に土地を求め農業に専念する。一方吉田茂のいわゆる「ヨハンセングループ」の一員として「昭和の鞍馬天狗」的活躍を始める。
- 一九四五(昭和二〇年) 吉田茂に請われ「終戦連絡事務局」参与に就任。GHQを向うにまわし、八面六臂の活躍が始まる。
- 一九四六(昭和二一年) 「日本国憲法」誕生の現場に立ち会う。「終戦連絡事務局」次長に就任。
- 一九四七(昭和二二年) 「終戦連絡事務局」次長を退任。
- 一九四八(昭和二三年) 初代の貿易庁長官に就任。商工省を改組し通産省を誕生させる立案者の中心的存在であった。
- 一九五一(昭和二六年) 電力再編成の分割民営をすすめ、東北電力会長に就任。サンフランシスコ講和条約締結の全権委員団に「同行」。
- 一九五九(昭和三四四年) 東北電力会長を退任。以後、荒川水力発電会長、大沢商会会長等を歴任し、大洋漁業、日本テレビの社外役員、「ウォーバーグ」顧問等をつとめる。八十歳の頃まで自らボルシェを乗り回し、軽井沢のゴルフクラブの理事長としてその運営に力を注いだ。
- 一九八五(昭和六〇年) 十一月二十八日逝去。

正子の方でも、死後の世界ではどなたと会いたいのかとの問いに
「西行」

と答え、次郎さんではないのですかと切り返されると、

「この世でさんざん会ってしまいましたからね」

と笑ったという（「西行と白洲正子」辻井喬 「ユリイカ」総特集 白洲正子）。

初めて白洲次郎氏を紹介していただいた時、私は多分白洲正子先生にはいつも種々お教えを受けておりますというような挨拶をしたのだと思う。すると、氏は一寸いたずらっぽい目つきで「君は、僕をずいぶん我慢強い男だと思っただろう」と言われた。私は、何の意味かよくわからなかった。第一その発音は、英語で話しかけられたのかと間違えてしまうような声音だった。私が聞き返すと、「あの婆さんと僕は今までつき合って来たんだよ」と言われ、私ははじめてそのジョークが理解できた。

もちろん、それは単なる冗談に違いない。だが、冗談の趣きには、たしかに白洲さん夫妻は並みの夫婦ではないなあ、白洲正子さんのような、「能」にしろ、明恵上人にしろ、あるいは骨董にしろ、自分の関心のある対象に一途に向かって行く作家を奥さんに持つということは大抵の「我慢強さ」ではかなわぬことだろうなあ、と今にして気づくニュアンスがこめられている。白洲次郎は作家と結婚をしたのではない。自分の妻が共に生活しているうちに、文筆を自らの職業として獲得したのである。白洲氏は夫人の仕事についてほとんど口をはさまなかったという。

ある時、私の友人は次郎氏から「君に夫婦円満の秘訣を教えてくださいませんか」と話しかけられ、是非お願いしますと耳をすましたら「一緒にいないことだよ」と語ったという。

器を見たときにもう花の形は決まってしまうという。その器も、高価なものである必要はなく、庭の竹や石、灰皿というもので間に合わせることもある。これはいかにも正子らしい。すなわちななものにとらわれない、自由な、自分だけの発想。

「私が一番うれしかったのは、近江の堅田のつくだに屋さんで、つくだにを煮ていた大笹を買った時である。何十年も使っていたのですばらしい味になっており、あれに寒菊をばっさり入れたらどんなにいいだろうと思っていたら、二つ返事でゆずって下さった。今は私の宝物の一つになっている」（同）

とらわれない自由な発想。それが白洲正子のバックボーンになり、生活のすべてを支える思想に昇華していたことがわかる。



40代から日本各地を巡り、50代以降、
紀行文を綴り続けた白洲正子さん。

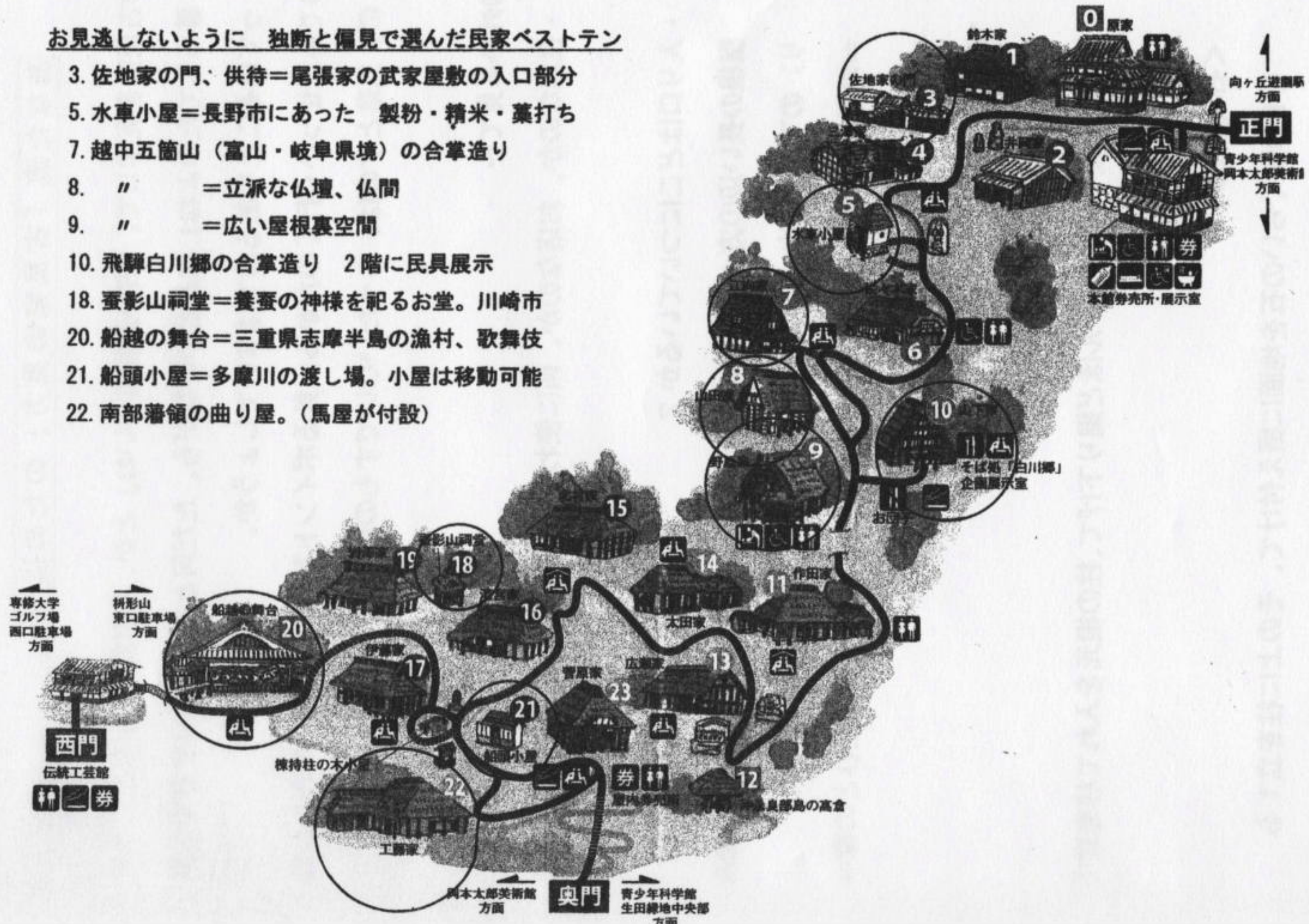
◎香山園（かごやまえん）について

1. 思いがけない立派な建物（＝大笠館瑞香殿＝瑞香は沈丁花で、瑞は北条早雲の号・宗瑞からとったという）、庭園があったものですね。
2. 瑞香殿は明治 39 年に建て替えられたもの。庭園は元禄 2 年に最初作庭、9 年に修復されたとのこと。
3. これらを作った神倉家の家系がものすごい。天竺の摩訶陀国（まかだこく）というからお釈迦さまと同じ国から出て、唐、楽浪を経て筑紫に至る。そして、^{たかくらじ}高倉下（日本書紀によれば、神武天皇が大和に入る際の最大の危機を救った熊野の土豪）に従い、その後、越後の国から武蔵の国（ここは都築郡）へ来着。北条氏綱（早雲の子・後北条氏 2 代目）に仕えて、ここに正式に居を定めたという。雄大な家系です。
4. 瑞香殿のなかで、個人的に一番興味を引いたのは、ご先祖をお祀りされている形式です。仏式でもなく、神式でもない、不思議な形式。これを拝見させていただくだけでも、ここにお邪魔したネウチがあると思います。
5. お庭の方は、NHK 大河ドラマ「八代将軍吉宗」のロケでも使われたとか。庭園のなかへ入って見せていただけなのが、うれしいです。

川崎市立 日本民家園

お見逃さないように 独断と偏見で選んだ民家ベストテン

- 3. 佐地家の門、供待＝尾張家の武家屋敷の入口部分
- 5. 水車小屋＝長野市にあった 製粉・精米・藁打ち
- 7. 越中五箇山（富山・岐阜県境）の合掌造り
- 8. " ＝立派な仏壇、仏間
- 9. " ＝広い屋根裏空間
- 10. 飛騨白川郷の合掌造り 2階に民具展示
- 18. 蚕影山祠堂＝養蚕の神様を祀るお堂。川崎市
- 20. 船越の舞台＝三重県志摩半島の漁村、歌舞伎
- 21. 船頭小屋＝多摩川の渡し場。小屋は移動可能
- 22. 南部藩領の曲り屋。（馬屋が付設）



あなた流「古民家の見方」のために～

- 古民家を見学して、「古い建物はいいね」とか、「昔は、こんなところで暮らしてたのよね」などといいながら、ただ何となく、通りすぎてしまっていることもあるのではないのでしょうか。
- でも、せっかく行くのだから、見るポイントだけは逃さないでみたいもの。見落とすのは、もったいないですものね。

◎外から見て～

- ・住居なのか、お店なのか、何に使われていたのか～を案内標識で確認

- ・入り口はどこについているか？

屋根の長い辺の方（平入り）の下にあるか、三角に見える屋根（妻入り）の下にあるか？

＝中世では「妻入りの方に入口がある」のは「役」を持ったひとの家＝

- ・土台はどうなっているか？

<掘っ立て柱>

地面を0.5～1メートルほど掘り下げて、柱の根元を入れて柱を立てる

<石場建て>

ヒトの頭くらいの石を地面に据え付けて、その上に柱を立てる

◎中に入って～

・大人、子どもなどが、その家でどんな生活をしていたか、想像しよう！

・「いろり」か「かまど」か？

一般的には、関西より西には「いろり」はない。～温暖なこと～

・「いろり」のオキテ

<横座> 座敷側（土間の反対側）が主人の席。上座ともいう。

昔、上座の横に畳かゴザが置かれていたため。

「ネコとバカは横座に座る」という言葉があります

<女座> 上座に直角になる席。お膳や食器を収納する戸棚を背にする位置。家長の妻、主婦が座る。奥の座、北座などという。

家長の母や娘も、主婦と並んで座る。

<客座> 女座と向き合う席。隣、近所など、気の置けないお客の席。

客のいないときは、家長以外の男が座った。

<下座> 土間側。雇い人や出入りの者。末座などともいう。

・柱は「ちょうな」か「鮑（かんな）」か？

材木が、何で削られているかを見よう。ちょうなの方が古い。

・釘は丸か角か？

丸釘の普及は明治17,18年ごろから。角釘ははがねで一本一本作った。

参考書

- 和楽ムック 白洲正子のすべて 花塚久美子編 小学館刊 08・09
- 白洲正子の生き方 馬場啓一著 講談社刊 00・09
- 風の男 白洲次郎 青柳恵介著 新潮社刊 97・11
- 白洲次郎の流儀 白洲次郎・正子 青柳恵介ほか著 新潮社刊 04・
- 白洲次郎名言集 清水将太編著 コスミック出版刊 07・
- 関西民家を楽しむ本 成美堂出版編集部編 成美堂出版刊 03・06
- 日本列島民家入門―民家の見方・楽しみ方 宮沢智士著 INAX刊 93・04
- 民家園解説シリーズ(合本) 川崎市立日本民家園編刊 11・02
- 日本民家園物語 古江亮仁著 多摩川新聞社刊 96・03